



キャンドルライトフォーディングを終えて 1年キャンドルライトフォーディング係

23期生72名の「第21回キャンドルライトフォーディング」が11月10日(金)14時より、本校体育館に於いて御来賓、先輩、保護者の方々多数の御臨席を賜り厳かに挙行されました。式では担任による呼名の後、学生1人ひとりがナイチンゲールの灯火をいただきました。その後、23期生全員で看護の道を目指す志を誓い、決意を新たにしました。

入学式で見た先輩の白衣姿は、目指すべき姿として強く印象に残っています。これまで“看護学生となった実感”を得る場面は幾つもありましたが、今改めて白衣に身を包むことで、責任の重さを実感しています。これから実習で患者さんとの関わりから多くを学び、少しでも先輩方に近づきたいと思います。

そして、卒業までの学生生活の中で積極的に看護の知識を深め、患者さんが安全に治療に励むことができるようにしっかりとサポートできる技術を身に付けていきます。また、信頼や期待が込められた白衣を着るのに相応しい人間となれるよう、決意を誓った仲間たちと成長していきたいです。身も心も引き締まるような式典を行えたことに感謝し、1人ひとりの理想とする看護師像に向かって日々努力していきます。

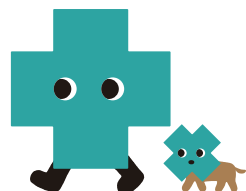


まいにちから、
まんいちまで。

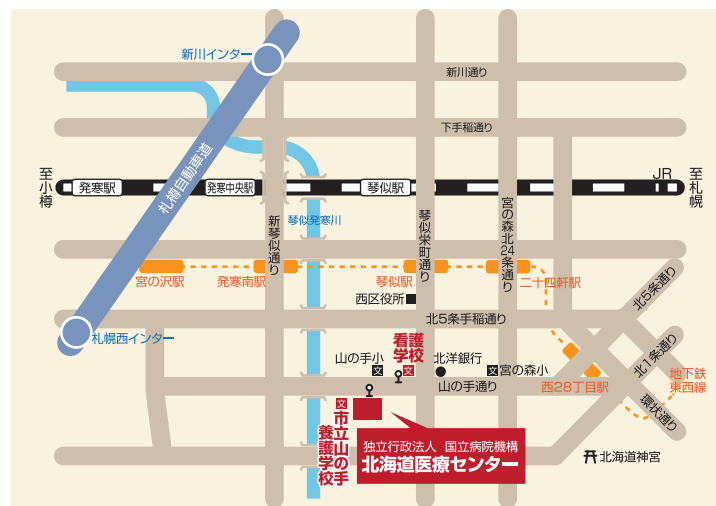
独立行政法人 国立病院機構
北海道医療センター



TEL 011-611-8111



〒063-0005 札幌市西区山の手5条7丁目1番1号



<https://hokkaido-mc.hosp.go.jp>

北海道医療センター

検索

●交通のご案内

- 地下鉄東西線 西28丁目 循環西21 山の手線 北海道医療センター前 下車
西21 山の手線 北海道医療センター前 下車
- 地下鉄東西線 宮の沢駅 JRバス 山の手線 北海道医療センター前 下車
西21
- 地下鉄東西線 琴似駅 JRバス 琴43 西野中州橋線 北海道医療センター前 下車
- JR JR琴似駅 JRバス 琴43 西野中州橋線 北海道医療センター前 下車
- 車で ■旭川・苫小牧方面より自動車ご利用の場合
札幌自動車道新川インターから
新琴似通り経由、山の手通り沿い
■小樽・余市方面より自動車ご利用の場合
札幌自動車道札幌西インターから
北5条手稲通り、新琴似通り経由、山の手通り沿い

北海道医療センターニュース

2024年
1月発行

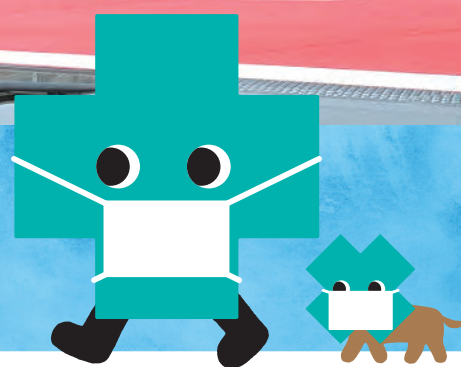
山の手だより

No
36



10月27日
(金)

当院ヘリポートにて
陸上自衛隊との
搬送訓練を実施



TAKE FREE
ご自由にお持ち帰りください

36号目次

まいにちから、
まんいちまで。

- 新任のご挨拶 副院長、統括診療部長のあいさつ 2P
- 北海道移行期医療支援センターの開設 3P
- 小児慢性特定疾病・在宅・移行期医療支援 センター長 田中藤樹
コーディネーター 小平沙希
- いきいき三角山フェスタ4年ぶりの開催! 企画課経営企画係 岩佐 美鈴 4~5P
- 筋疾患WEBセミナーについて 理学療法士 室田英樹 言語療法士 小西博文 6P
- デュシェンヌ啓発デー 療育指導室 7P
- キャンドルライトフォーディングを終えて 1年キャンドルライトフォーディング係 8P

新任のご挨拶

副院長、統括診療部長のあいさつ

令和5年9月1日から当院の副院長を拝命いたしました伊東学と申します。専門は整形外科で、脊椎脊髄疾患の外科医療を担当しています。

私の生まれは横浜、育ちは藤沢市で、北海道大学に入学した昭和56年に初めて北海道の地を踏みました。昭和62年に北海道大学医学部を卒業し、同大学整形外科教室で研修を開始し、道内の複数の医療機関に勤務いたしました。平成4年から2年間、米国のニューヨーク州の西にあるシラキュースという都市のニューヨーク州立大学アップステイトメディカルセンターで脊椎外科領域の研究者として働きました。平成6年に帰国し、長らく北海道大学病院整形外科にお世話になりました。平成22年から北海道大学大学院医学研究科脊椎脊髄先端医学講座の特任教授を4年務め、平成26年4月から当院の脊椎脊髄病センター長として赴任いたしました。平成28年から統括診療部長を任じられ、胆振東部地震や新型コロナ感染への対応にも従事させていただきました。

当院、北海道医療センターの強みは、総合病院として各診療科のエキスパートが集結していること、3次救急から難治性疾患までの幅広い病態に対応できることだと思います。特に、経験のある医師から若手の研修医、診療看護師をはじめ、多職種のコメディカルとの連携が密でしっかりしています。災害や新興感染症はもとより、地域の医療機関で診療が難しい複雑な病態の患者様や、多くの基礎疾患をお持ちの患者様の命と生活を守る機能をしっかりと維持してまいります。引き続き皆様の温かいご支援とご協力をお願い申し上げます。



副院長
伊東 学

地域の皆様には日ごろから大変お世話になり感謝しております。

この度、令和5年9月1日付で統括診療部長を拝命いたしました。

北海道医療センターに赴任してちょうど5年となります。統括診療部長となるには勤務年数がやや短いかもしれませんが、これまでに任命していただいた外科系診療部長、がん相談室長、手術部長、医療安全管理室長、地域医療連携室長、クオリティマネジメント室長をとおして多くの経験をさせていただきました。それらから学んだことを生かしてこの職責を全う出来るよう努力いたします。患者さん・ご家族、地域医療機関の先生方から、安心して選んでいただける病院となるよう、さらに改善に取り組んでまいりたいと思います。今後とも、よろしくお願い申し上げます。



統括診療部長
川村秀樹

北海道移行期医療支援センターの開設

小児慢性特定疾病・在宅・移行期医療支援 センター長 田中藤樹
コーディネーター 小平沙希

昨年、当院内に「小児慢性特定疾病・在宅・移行期医療支援センター」を開設後、院内・外の移行調整に携わってきました。さらに、本年8月1日より北海道移行期医療支援体制整備事業において、北海道から委託を受け「北海道移行期医療支援センター」をセンター内に開設いたしました。北海道全域における移行に関する課題解決に向けて、支援の輪を広げていきたいと考えています。

移行期医療支援についてですが、移行年齢である15～20歳前後の小児期発症の慢性病患者様に対して、1)患者さん自身が移行していくための自律(自立)への支援、2)小児診療科から成人診療科への移行に関わる医療体制の整備を提供していきます。

自律(自立)支援では、これまで保護者が率先して医療を受けさせていた小児患者に対して、自らが未来を考え、ヘルスリテラシーを獲得し、医療管理ができるように成長・発達に応じた支援をしていくこととなります。体制整備については、かかりつけ医、専門診療医、急性期疾病への後方支援病院などの病院整備のほか、行政制度や教育、福祉、就労などの支援に多職種で共働していくこととなります。すでに移行期年齢以上となっている方には喫緊の課題となります。適切な成人診療科にトランジション(転科)するには成人診療科の情報が欠かせません。成人診療科の先生方と密接に連携を取って移行期医療にご協力いただけるよう説明や啓蒙に勤めます。そのために、医師とともに移行期医療支援コーディネーターも配置いたしました。

本センターは、北海道内全域における患者や医療機関に対して移行期医療を支援していく拠点センターの位置づけとなっておりますが、まず院内の患者様を対象に移行期医療を進めていくことで先鞭をつけ、指導的立場として道内各地域に支援の拠点を作り上げていくことも目標となります。当院HP内に移行期医療支援センターのページがありますので、そちらからご相談ください。下記QRコードからもご覧いただけます。



いきいき三角山フェスタ 4年ぶりの開催！

企画課経営企画係 岩佐 美鈴

9月30日、第8回いきいき三角山フェスタが開催されました！2013年以降毎年開催されてきた三角山フェスタですが、2019年開催以降コロナで中止が続き4年ぶりの開催となった今回、地域の方も職員もこの日を待ちわびていたことと思います。

開催当日は天気にも恵まれお祭り日和となりました。長尾院長の開会挨拶からスタートし、毎年大好評の救急車乗車体験はすぐに予約がいっぱいに。救急車内の設備について臨床研修医から説明を受けながら見学したり、病院敷地内を走行したりと普段なかなか体験できないこともあり、参加した方々は大変満足されていたようです。救急車体験に次ぐ目玉企画として、札幌西警察署の協力により警察車両展示を行いました。パトカーに試乗して「前の車止まって下さい」とマイクを通して警察の体験をしたり、白バイに試乗して記念撮影をしたりと子ども達に大人気のブースとなりました。



病院ならではの体験コーナーも大好評でした！臨床工学室ブースではコロナ治療で話題となったECMOの仕組みを知るための体験コーナーを実施。ニュース等では耳にしたことはあるが、実際にどのような仕組みでECMOが肺のような機能として動くのか知らない人が多いのではないのでしょうか。大人も子どもも興味津々で説明を聞いていました。薬剤部による調剤体験や検査科による測定コーナー、放射線科による放射線装置見学ツアーなど病院業務の一部を紹介するブースにたくさんの方が足を運んで下さりました。

また、筋ジス患者さんが作成したイラストや3Dプリンタ作品などの展示、実際に入院中の患者さんとオンラインでゲーム対戦をするe-sports体験なども大変好評でした。



看護による企画では、白衣やDMATのユニフォームを着て写真撮影や、手洗い体験、バルーンアートのプレゼントなどを行いました。手洗い体験コーナーはコロナや風邪が流行り出す季節ということもあり、たくさんの親子連れの方々が参加。特殊な塗料を付けて手洗いをし、塗料がきちんと落ちているかブラックライトを当てて確認していました。正しく手洗いでできているか親子で再確認する良い機会になったのではないのでしょうか。



院内保育所のきしゃぽっぽ保育園園児によるお遊戯、奇術師わたるんによるマジックショー、旭川医療職員と当院職員の有志バンドメディカルリズムボックスによるコンサート、看護学校学生によるダンス、HMCアンサンブルによる演奏などステージ企画も盛りだくさんでした。



たくさんの企画・ブースがあり、今回の記事では紹介しきれないのが残念です…。職員のみなさんのおかげで935名の方に来場いただくことができました！過去最高記録更新です。

来場者アンケートでは「活気にあふれ、どの年代も楽しめるフェスタだった」「医療を身近に感じる事ができた」「来年もまた開催してほしい」との声を頂きました。来年度もさらにパワーアップした三角山フェスタを開催できるよう企画していきたいと思ひます。



筋疾患 WEB セミナーについて

理学療法士 室田英樹 言語療法士 小西博文

2023年11月21日に当院西館にて筋疾患WEBセミナーが本会場とWEBのハイブリット形式で実施されました。コロナ禍となってWEB方式のセミナーが主流になりましたが、5類へ移行後も継続されており感染対策だけではなく、道外の講師にも依頼しやすいこと、現地に足を運ぶ必要性がないため、自宅や外出先でも受講することがメリットとなっております。当院西館には現在筋ジストロフィーを中心とした患者さんが多く入院されているため、それに関連する勉強会についての紹介です。

教育講演Ⅰ「筋疾患と食にかかわるケアについて」は筋疾患だけではなく、嚥下障害(飲み込みづらくなる障害)がある患者さんの食事形態の工夫(刻み食、とろみなど)や薬剤については錠剤などの固形物は飲み込みにくいため、ゼリー化して飲み込み易くするといった内容でした。

教育講演Ⅱ「筋疾患の嚥下障害の特徴」は筋疾患の患者さんにおいて嚥下圧のかかにくさ(飲み込んで胃へ引き込む力の低下)や食道入口部の通過障害において嚥下造影検査(VF)にて診断・精査するといった内容でした。

教育講演Ⅲ「呼吸リハビリテーションの最前線」はポンペ病(筋肉を中心に症状が見られる遺伝性の病気。酵素の問題によって、筋肉に糖が過剰に蓄積することで起こる)に対するMIE(気道粘液除去装置)による排痰介助や酵素療法(生まれつき活性が低下または欠損した酵素を製剤として体外から補充することで酵素活性を高め症状を改善する方法)について紹介されました。

sanofi 筋疾患WEBセミナー
～押さえておきたい筋疾患の話題～

日時 2023年 11月 21日(火) 18:30～20:05

視聴方法 ZOOMで配信予定
【視聴登録URL】※詳しくは画面をご確認ください
https://sanofi.zoom.com/webinar/register/WN_x6Fk_tCvTruI90JSkxD11w

～プログラム～

『ネクスピアザイム』情報提供 サノフィ情報提供担当者

座長 独立行政法人 労働者健康安全機構 横浜労災病院
脳神経内科・神経筋疾患部 部長 中山 貴博 先生

＜＜教育講演Ⅰ＞＞ (18:35～19:05)
『筋疾患と食にかかわるケアについて』
独立行政法人 国立病院機構 大牟田病院
脳神経内科 医長 荒畑 創 先生

＜＜教育講演Ⅱ＞＞ (19:05～19:35)
『筋疾患の嚥下障害の特徴』
国立精神・神経医療研究センター病院
嚥下障害リサーチセンター長 山本 敏之 先生

座長 地方独立行政法人 東京都立病院機構 東京都立神経病院
神経小児科 部長 熊田 聡子 先生

＜＜教育講演Ⅲ＞＞ (19:35～20:05)
『呼吸リハビリテーションの最前線』
独立行政法人 国立病院機構 北海道医療センター
神経筋/成育センター長 石川 悠加 先生

世界デュシェンヌ啓発デー

療育指導室

9月7日に、西2階病棟テラスから「世界デュシェンヌ啓発デー」のシンボルである赤い風船を参加者全員で願いを込めて空へ飛ばしました。

2014年に神経筋難病への意識、理解を高めるために世界デュシェンヌ機構のメンバーであるエリザベス・ヴルームさんとニコレッタ・マディアさんが立ち上げられた「世界デュシェンヌ啓発デー」。今年で10年目を迎え、世界では赤い風船や建物、記念碑を赤色にライトアップ等様々な形で行われています。

当院も「世界デュシェンヌ啓発デー」に賛同し、昨年度から行事として開催しています。初回はコロナ禍ということもあり、少人数で約40個の風船を空へ放ちました。

2回目となる今年度は、ポスター掲示や風船数を増やしての実施となりました。ポスターを見た利用者から、行事を楽しみにしているとの話も聞かれていました。

当日、50名と多くの利用者やスタッフが参加のために集まり、一丸となって準備を行いました。患者会副会長の歸山さんの「自分たちの医療や生活の未来が明るくなることを祈って」の言葉を合図に100個の赤い風船を青空へ一斉に打ち上げました。赤い風船は空へ高く遠くへ飛んでいき、それぞれの想いやよりよい未来を祈りながらその様子を参加者はずっと見送っていました。

この行事を通して、多くの方に神経筋難病をもっと広く知ってもらい、みんなで共存できる社会を作っていくことのきっかけになればと思います。

